日本ＥＩＭＹ研究所報
ＥＩＭＹＪ－１３０１
平成２５年１月

どのような人間が活躍したか

ではどのような人間が震災に際して活躍しているのであろうか。それは学歴に無関係に「自分の頭で考え、自分の言葉で話せる」人間である。

我が国では、明治維新以来、富国強兵のための教育が推し進められ今日に至っている。そこでは、ある普遍的な能力を持った代替可能な人間の育成が重視される。コンピュータにソフトウェアをインストールするように、高等教育では一定の品質が保障された普遍的な能力や知識が付加される。そこでは人間の個性ではなく、その知識や能力そのものが重視されるのである。その付加された能力とマニュアルによれば、想定された課題である限り、お互いの人間的コミュニケーションがなくとも一定の成果をあげることができる。整備された道路を、交通ルールを守って一定の運転技術で運転していれば、ドライバー間のコミュニケーションが無くとも無事目的地に到着できるのと同様である。

学問や技術の分野でも、いつしか世界中どこでも通用する普遍性や一般性、客観性が過度に重視され、個別の事象や地域の史実、あるいは当事者としてのものの見方を軽視するようになってしまった。

このような教育は、自分である必要のない人間を生むと同時に、多くの悩む個人を生んでいる。近年とみに、この付加された知識や能力と、個性との乖離、そして人間としてのコミュニケーション能力の低下が進んでいる。このような教育課程を勝ち進んだ人間が高学歴社会を構成しているが、その付加された能力が高ければ高いほど、その人間性との乖離が大きくなるのは皮肉である。平時ではその能力によって、退化した人間性を取り繕うことができるからである。

震災は、深刻な想定外の事態の連続であり、個々別々の事象の集合である。そこではマニュアルも、従前の「上からの流れ」に沿った思考も、一般論も統計論も役立たなかった。一人の人間として地域に入り、個々の地域の、個々の被災者の生の姿に接することなく、従前の「上からの流れ」に沿った思考と発言を繰り返し、「御用学者」の汚名をきせられた専門家も少なくない。

このような中にあって、地位や学歴に関係なく、「自分の頭で考え、自分の言葉で話す人間」が活躍したのである。